

とす。土師連等、道路の言を聴き、且壯大なる出師準備を目睹して憂慮已まず、速に之を天朝に奏し、防禦の策を進めむと欲す。然りと雖財物空亡して路用を得ることを得ず、焦慮懊惱身を置くに處なきが如し。五者鳩首、熟議之を久うすれども未だ策の出づるを知らず。

博麻意志鐵石の如く、牢乎として抜く可からず、乃ち慨然として提議して曰く、『諸氏乞ふ之を聴け、吾も亦與に故國に還り、當國の事情を奏せむことを思ふ。然れども身は之虜囚、且衣糧を得るの手段有る莫し諸氏よ、願くは吾を賣りて衣食の資に充て、速に故國に還れ、吾適外征に従ひて寸功の樹つる無く、既に百濟に死すべくして未だ死せず、徒に恥を異域に曝すや久きもの有り、乃ち屑く餘命を抛ちて、邦家の恩に酬う之吾の行く可き道ならずや』と、四者感激し、其言を壯とし且之を制す博麻應ずる莫く、口を極めて國家の危急を叫ぶ、遂に止むることを得ず率ゐて以て商賈に販り、若干の黄金に替ふ。爰に於てか博麻初めて安

慰の色あり。氣を壯にし心を強うして四者を激勵す。已にして土師連等本國に還り、急馳して唐國の形勢を奏す、滿廷震駭、直に防禦の策を講ず。

爾來三十有餘年、博麻獨唐に留り、粉骨碎身、營々として苦役に服す。事遂に叡聞に入り、厚く之を賞して三族の課役を免じ、水田を賜うて惠を其曾孫に及さしむと云ふ。

天皇吉野の風色を愛好し、屢群臣を隨へて此の地に幸す。蓋し吉野は之舊相識、谿谷流泉一として當年蟄居の懷を新にせざるは莫し。一日天皇吉野に在り。陪從の歌人柿本人麻呂乃ち其山川の美と皇徳の尊に感じ、懷を即詠に寄せて曰く、『安見し、我大君、神ながら神さびせずと、芳野川、たぎつ河内に、高殿を、高知りまして、のぼり立ち、國見をすれば、た、なつく、青垣山、山神の、奉る貢と、春べは、花かざし持ち、秋たてば、紅葉かざせり、ゆふ川の、神も、大御食おほみけに、仕へ奉ると、上つ瀬に、鵜川をたて、下

つ瀬に、さでさし渡す、山川も、よりて仕ふる、神の御代かも』と、寔や君臣和樂、神人冥合の景情、描き盡して餘蘊有るを見ず、眞に太平の象、天地に磅礴すと謂ふも可なり。

回顧すれば壬申の亂鎮定の後、天武天皇飛鳥に還御し、宮室を淨見原に築きて天下に君臨す。惟ふに天武の大業を完成するや、實に飛鳥舊族の一致後援に俟てるもの多きに居る。而して方今天下の趨勢を察するに、必ずしも舊族の思想と相容れざるもの多々有り。乃ち大陸の文化は駸々として來至し、海外交渉の案件は日に益繁きを加ふ。此の時に當りて、交通不便の大和の一隅に介在し、依然として舊態を保持し、永く舊習を墨守して果して何事をか成し得むや。宜く飛鳥の舊勢力を驅逐し、之が羈絆を脱却して、独自の天地を打開するにあらずむば、國威の宣揚、國力の發展、亦遂に望み難きを如何せむ。然れども天武は遂に舊族と袂を別つ能ざる關係下に在り。之其最も苦慮の存せし點な

らむか。

天武十三年、三野王及び采女臣筑羅等を命じて、遠く信濃に到らしめ、其國內の地形を精査して、山川平野の布置を作圖せしめ、以て遷都の候補地を物色したるに徴するも、亦如何に飛鳥撤廢の必要を痛感せられしや想ふ可きなり。已にして其遷都の行はれ難きを覺るや、一轉して新舊思想の調和に力め、相互の便益を主として、皇城の周圍に別に適地を索め、更に擴張發展の計畫を樹立するに至りしかど、之亦不幸にして其實現を見る能ずして已めり。

持統天皇乃ち先皇の遺旨を尊重し、遂に之を履行して新益京にい、ますきやうを建て、以て時代の進運に適應せしむ。蓋し其名稱の起因、新に増益せる意味なるべきか。新京は其位置淨見原の西北に在り、之を舊京の制に比すれば、新味特に夥しきものあり、加ふるに、大和の三山泰然として鼎立し、萬人齊しく其美を仰ぐ。人あり、藤原宮の風光秀麗にして且清泉の掬

すべきを稱へ詠じて曰く、『安見し、わご大君、高照らす、日の皇子、あらたへの、藤井が原に、大御門、始め給ひて、埴安はたやすの、堤の上に、あり立たし、見し給へば、やまとの、青香具山は、日のたての、大御門に、春山と、しみさびたてり、畝火の、この瑞山みづやまは、日のよこの、大御門に、みづ山と、山さびいます、耳梨の、青すが山は、そともの、大御門に、よろしなへ、神さびたてり、名ぐはし、吉野の山は、かげとももの、大御門ゆ、雲井にぞ、遠くありける、高知るや、天の御かげ、天知るや、日の御かげの、水こそは、とこしへならめ、み井の眞清水』と。然り而して時代は刻々推移して休まず、次いで來たらむ者夫れ果して何なる可きか。吾人が翹望すべき天平爛漫の世界は、既に夙くも眼前彷彿の間に迫れるを見む。

(昭和八年五月稿)

飛鳥時代終

昭和八年九月八日印刷

飛鳥時代奥付

昭和八年九月二十八日發行

【定價金三圓八十錢】

著者

木村定次郎

發行者

東京市深川區常盤町二丁目一番地
吉田百邦

印刷者

東京市芝區田村町六丁目十三番地
大西久八

印刷所

東京市芝區田村町六丁目十三番地
大西印刷所

不許
複製

發行所 東京市深川區常盤町二ノ一

吉田書店出版部

振替東京三九八六六番
電話本所(73)七一六番

64
10

天平時代

菊判約四百五十頁
装幀極めて典雅美麗
其他飛鳥時代に準據

天平文化の爛漫たる状態は、之を希臘のペリクレスの時代にも對比しつ可し。而して彼は即ち紀元前六五世紀に於て、其美花を爛發し、俄然として滅びしに反し、吾に在りては皇紀一千三百八十餘年、聖武天皇を中心として、其前後約七代七十餘年を算するを得べし。併し乍ら天平文化の爛熟豈一朝夕に成らむや、蓋し其礎地夙く飛鳥時代に築かれしと見るべからむ。本卷は即ち飛鳥時代に次いで、奈良の朝野に活躍したる人物と事業との悉くを網羅す。當代政界の中心を成せるもの、不比等、廣嗣、諸兄、奈良麻呂、仲麻呂、玄昉、道鏡、清麻呂、百川等あり。奈良、奠都、大佛鑄造、皇嗣問題等の重要案件を繞りて、各自三面六臂の活劇を演じ、讀者をして送迎に遑なからしめむ。

64
10

640
109

